
青い空に両手を広げて

立花沙耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い空に両手を広げて

【Nコード】

N3128B

【作者名】

立花沙耶

【あらすじ】

先の戦乱から五年、一番の被害を受けた国境付近の小さな村。その村の唯一の生き残りであるシャオ。それは、古の救世主・アルテアによって記された戦いの開戦の合図でもあった。

序 曲（前書き）

今までの『青い空に両手を広げて』と小説の内容が変わっています。
第一曲からご覧下さるようにご了承下さい。

序 曲

五年前に、隣国で大きな戦争が起こった。
国同士の勝手な争い。それに巻き込まれた罪のない村人。
それでも、少年にとっては関係のない事ですんでしまう。

「戦争で、みんな消えてしまえばいい。男も…女も…人間という人類全て、何かに、罰せられるべきなんだ」

誰もが持っている感情や欲求を持たず、血のかような身体でさえも、温かみを持たない。

十二年前、実母に殺されかけたあの日から…。

何が引き金になってしまったのか、未だに分らないまま少年は自分という人間の価値がない事に脅えていた。

いつも自分なんかよりもずっと大きかった母が、その時はもっと、ずっと大きく感じて。

母から伸ばされたいつもは優しいの手が、首すじにひやりとまとわりついて、その時の母の嬉しそうな顔が余計に少年の心に苦痛を与え、いまでもまだその闇はその心に巣くっていた。

「人間なんて……消えてしまえば……」

ゆっくりと鏡に手を合わす。

「人間、なんて……俺なんて……」

鏡に映る自分を見ていた少年は急に顔をゆがめた。

母に愛されなかったこの顔。

愛されなかったこの身体。

母を愛すことの出来ないこの心。

少年は自分という存在全てが、嫌いだった。

それでも、少年は鏡に向きなおる。

鏡の中の自分も少年と同じようにゆっくりとそれを重ね合わせる。

まるでそこからなにか温かいモノが生まれるかのように、心地よい。

「…俺は、一体何のために生まれたのですか？」

愛されたい。

たった一人の少年のその願いが、大国を動かしてしまうほど大きく、強いことをまだ、誰も知らない。

序 曲（後書き）

ファンタジーは初めて書きます。
至らない点、などございますが、感想や批評などをいただけるとありがたいです。

第一曲 始まりの唄「上」

『約束したを…した…太陽が沈む…暁の中で…』

『…決してこの手を…離さないと…だけど…アナタはそう言って…
決意するから…』

その歌声に呼応するように風が二人の髪を揺らす。

シャオは、愛しげにこの唄を唄う。

トレリアは悲しそうにその声を聴く。

唄が終わったのか、微かな沈黙が流れる。

その沈黙を破るのはいつも同じ。翡翠の髪と碧の瞳をした少女、トレリアの方だ。

「それが、貴女が唯一覚えてる唄…なんだが、とても悲しい唄ですね」

その声にこたえるように、白銀の髪を持つ少女が振り返る。

ここは、この星を収める大国の首都の中核に位置する王城。

翡翠の髪に碧の瞳を持つトレリアはこの大国の一の姫であり、白銀の歌姫と名高いシャオの唯一無二の親友だった。

透き通ったその声は、聴く人全てを魅了する。それが、シャオは国民から、白銀の歌姫と謡われている理由だ。

「シャオは、本当に歌が好きですね」

トレリアは小さく笑う。

「好きよ。……これは、恋人を謡ったもののなの。もう一つ、対になるパートがあるのだけれど、私はそのパートを知らない。恋人と唄ったはずの唄さえ、私はなくしてしまったの」

シャオの悲しそうな表情にトレリアも悲しそうに微笑む。

シャオは、自分が何者なのかを、知らないから。

二人が出会ったのは、三年前。

傷だらけのまま森で倒れていたシャオは表情もなく、感情を露わにする事もなく、ただ虚ろな目をしていた。

そしてトレリアと少しずつ話すうちに今のように時折だが、感情を表すようになった。

トレリアにとってそれはとても嬉しいことだった。

でも、誰も彼女が失った本当のモノを知らないのだ。

シャオはトレリアをまっすぐに見つめた。

大国の王女であるトレリアとシャオが出逢ったのは今から五年前だ。元々シャオは国外れの小さな村で暮らしていた。その村には、普通の町に在るような娯楽は一切なく、あるのはささやかな平和。それが崩れたのが五年前の戦乱だ。国境付近に位置したシャオの故郷は戦乱の地と化してしまった。村は焼け爛れ、人は死んだ。その中で唯一生き残ったのが、まだ十一歳の少女であつたシャオ一人だった。

トレリアはシャオを引き取り、居場所を与えた。生きているコトが、不思議な状況だった。

『遠い昔の…果てしない…約束を…君は…君は…』

トレリアはふと顔をあげた。

シャオが口ずさんでいる歌は、”あの唄”ではなかった。

トレリアと関わって、知った誰でも知っている歌。

そしてそれは、古の時代国民に夢と希望を与えた王族に忠誠を誓う、守人の歌だった。

『交わしても…それでもなお…求めるのは…君が…とても一途だから』

シャオは不思議な存在だと、城中で噂になっている。

この世に存在するはずのない白銀の髪も、その身にまとう桁違いの霊力も。……………すべて。

『守るといった…あの儚い…約束ごとを…』

シャオは、ゆっくり部屋の中へと戻って行く。トレリアが急いで後を追うと、その部屋の中にある一番大きな鏡が、光り輝いていた。

歌が途切れる。

「戦乱の時代が、始まってしまっ」

第一曲 始まりの唄「下」（前書き）

『前話までのあらすじ』戦地となった村の唯一の生き残りであるシヤオは王女であるトレリアに引き取られ現在は王城で暮らしていた。白銀の髪を持つことから白銀の歌姫と呼ばれていた。過去の記憶を持っていないシヤオを、トレリアは心配していて・・・。

第一曲 始まりの唄「下」

透き通った水面。

木々から滑り落ちた落葉が、ゆらゆらとその水面を揺らす。

ゆら、ゆら。

ゆら、ゆら。

アオは一人で、その葉を見ていた。

いや、一人ではない。水面を覗き込むように佇むその背後に、他者には見ることの叶わない、幽霊のような存在が確かにいた。

「ねえ、父さんの話を聞かせてよ」

アオは水面を見つめたまま呟く。

するとそれに答えるように、その存在が、ゆっくりと自らの姿をはつきりとしたモノに替えて行く。そこに始めからその少年が存在していたかのように、アオはその姿を一瞥した。

先の戦争。

それで、アオは母と姉と妹を失った。

残されたのはまだ十歳になったばかりのアオと顔も知らなかった父だけだ。

『ミドリのか…？』

その少年はなにかを懐かしむように、目を細める。

『あいつは、いつもお前の事を話していたよ』

少年は優しく微笑む。

『今日はアオが初めて立ち上がったとか。今日は初めて歩いたんだとか。そんな父親らしいことしか、アイツは話さなかった』

「父さんは…どうして僕に会いにきてくれなかったのかな」

アオは少し悲しそうに少年を見る。少年はアオの問いに少なからず驚いたようで、目を大きく見開いて固まった。

普段は澄ましたような表情と態度ばかりをとっているから、たとえば、外見が十歳ほどにしか見えなくても、少年が何千年も生きている事を否応なしに、実感させられていたアオだったが、こういう表情は歳相応に見えなくもないと微かに笑った。

『アイツは会いに行かなかったんじゃないって…』

少年の話を遮るように風が吹いた。その風の微かな変化にアオはふと顔をあげた。

『どうした？』

脳裏に直接響いてくるその声は、微かに心配そうな音を含んでいる。

「…いや」

『サラリエルが動いたのか？』

アオは微かに頭を横に振った。

「わからない。わからない、けど…用心した方がいいかもしれない」
アオは自分の傍らで何かを思案しているような少年に視線を投げかける。

『仲間を、見つけておいたほうが良さそうだ』

第二曲 戦乱を誘う神子「上」(前書き)

『前話までのあらすじ』天涯孤独な少年アオと、不思議な少年は水面を眺めたまま、今は亡きアオの父の話をしていた。

風に乗ってきた不吉な予感を本能で察知したアオは少年と共に、仲間を探し始めた。

第二曲 戦乱を誘う神子「上」

少年に導かれるまま、アオはその大きな門を潜った。

「ねえ、勝手に入っていいの？」

少年に誘われて足を進めたのは、この大国を収める王城の中だった。

『かまわないさ。ここは、天の神子の拠点だから』

少年はさらりと言う。

天の神子。それは最近初めて知った存在。

アオの父がこの薄青のペンダントをアオに託す五年前まで、アオはただの子どもに過ぎなかった。

天の神子として少年の主として城に住み込んでいたという父。

今では、そのペンダントを持っているアオが、その主として現在、天の神子と呼ばれている。

『ここだ』

少年はふと銀色の扉の前で足を止めた。

開ける、と目で言う少年にしぶしぶ従ってその扉を開ける。

その瞬間、アオは見た事のない白銀と碧色の髪に目を奪われた。

二人の少女が、無言でアオを見ている。

すると普段は姿を隠している少年が、姿をその二人の前に曝した。急に現れた少年の存在に碧色の髪の少女は驚いていたようだが、もう一人は表情一つ変えない。

『カリヨ…出て来い』

少年は呟くようにいった。

「……………」

一瞬の沈黙。破ったのは少年ではなく、白銀の少女の方だった。

「わたしはシャオ…ご存知のとうり、アルティアの神子であり、カリヨの主…こっちはトレリア。知ってると思うけど、この国の王女よ。今のところ、アルティアの神子とは関係ないわ」

シャオはアオに分るように丁寧に自己紹介をしてくれた。
ひと段落つくのを待っていたのか、トレリアが口を開く。

「…シャオ、アルティアの神子というのは世界を救った救世主のことではなくて？」

トレリアはアルティアという名前をかすかに記憶していたのか、シャオに問うた。

「いいえ。それは確かにこの国に伝えられていた、天地戦争時代の言い伝えだけれど、本当はアルティアというのは、天と地、四組の…計八人の姉妹を統べていた者の名で、その神子というのはその少年のような核珠と呼ばれる存在の主になった人物のコトをいうの」

そしてゆっくりとアオに向かって足を進めてくる。アオの目の前までくると、腕に嵌めてあった紅い玉きよくのついたリングに手を翳す。

『天は…望み、地は…望む。刃を違えた天地は自らの望みと対称な形をかたどっていく。天地の闘争の連鎖は、天地の子どもたちの手

によつて、断ち切られん』

その言葉を聴いて、アオは心が押しつぶされそうになった。
過去の神子が起こした過ちが、こんなにも後の世代^{のち}まで続いている
事への罪悪感からかもしれない。

「…これが、アルティアの本当の遺言。そして、その時に地上に八
つの珠^{きよく}が飛び散った。一つは彼の持つ癒しと疾風を司る風のペンダ
ント【ブルーレル】。まあ、ブルーレルについては、その本人に
聞くといいわ」

その名に呼応するように少年、ブルーレルの姿は薄青に輝きだす。

「そうして二つ目…私が持つ、業火と破壊を司る焰^{ほむ}の剣：【カリヨ

」

そういうと、リングは紅い光に包まれ、ゆっくりと形を変えていく。
アオとトレリアが呆然とそれを見ていると、柄の部分に勾朱色の珠
のついた剣に変わった。

そしてその光は剣から離れ、薄青に輝き続けているブルーレルのよ
うに人の姿をかたどった。

小さな少年の形^{なり}をしているブルーレルとは対照的に、それは背の高
い儚げな容姿をした優しそうな女性だった。

『ブルーレル、お久しぶりです。元気そうですね。』

その容姿に見合うように、その女性、カリヨはおっとりとした口調
で喋る。

その口調や容姿からは業火や破壊などという言葉は似つかわしくは
ない。

『そんな挨拶はどうでもいいんだよ！俺が聞きたいのは、お前がどつちにつくかだ。もし敵になるなら、容赦はしない』

ブルーレルの剣幕に動じることなく、カリヨは微笑む。

『貴方は、それを私にききますか^{わたくし}』

またも、一瞬の沈黙。ブルーレルは微笑みを絶やさないカリヨから目をそらし、ふつと鼻で笑った。

『……いや、愚問だな。まあ、お前の答えが分っているからこそ、俺はココに来たんだ』

カリヨとブルーレルは微かに口元に笑みを浮かべていた。

その間にも、シャオはトレリアに、説明を続けていた。

「私たち神子は、アルティアの子供のような存在。……親が子を選べないように、子も、親を選べない。つまりは、天命からは逃れられないというコトよ。私達、アルティアの神子は……」

「それって……」

トレリアの瞳が悲しそうに歪む。シャオはそうなる事が分っていたように俯く。

「ごめんさい。トレリア、私は……戦うために生まれてきたの。あの村で暮らして、その村で戦乱が起こって……私一人が生き残るのも、皆決まっていたことなの」

決まっていたこと。

その言葉にアオは、死の間際の父の言葉を思い出した。

「すまんなあ。本当はこれをお前にあげたくはなかったんだが…オレもそろそろ限かいのようだよ」

そういつてこのペンダントを差し出した父。

「もう生きられないほど、この身体は病に蝕まれてる」

「…え？なに、どういう事？」

「お前は…どっちをとるのかな。兄弟を、あの子を裏切つてオレのように孤独に死ぬか…戦つて、英雄となって死ぬか。どっちだろうな」

「父さん！」

それが、生まれて初めて父を呼んだ瞬間だった。

「アオ、オレはお前にそう呼んでもらえて、嬉しかったよ」

ゆっくりと、父の手が冷たくなっていくのを感じていた。

「もう少し、お前と過ごしたかったよ。ブルーレルを、よろしくな」

なかなかペンダントを受け取らないアオに痺れを切らしたのか、父は無理矢理アオの首にそのペンダントを提げた。

あの時は、全く意味が分らなかった父の言葉。一人っ子なのに兄弟

を裏切るとか、あの子とか、英雄になるとか…どっちをとって死ぬとか…。でも、今の説明でその言葉に意味がやっと分った。どうして忘れていただろう…神子というのは、他国の言葉で血縁のない双児という意味だったでないか。

「父さんの死も…決まっていた事だったのかな」

アオの小さな呟きも静かな部屋には丁度良い大きさとなって、全員
の耳へと届いた。そして、ブルーレルが微かに眉を寄せるのを、カリヨは横目に見ていた。

一代前のブルーレルの主だったアオの父はブルーレルの前で死んだ。きつとブルーレルは今でもまだ、彼を護れなかった事を悔やんでいる。

「やはり、貴方の父も死んでいったのね。……血縁に関係なく、さまざまな家に生まれる【カリヨ】や他の珠とは違きよくって、癒しを司る【ブルーレル】は好まれる。故に珠の中でも【ブルーレル】だけは世襲制だから」

アオは胸に掛かったペンダントをぎゅっと握りしめる。

「僕は…本当は戦いたくない。…その戦いの中で、護れるものもあるかもしれない…でも、失うものの方がきつと、ずっと多いだろうから」

ブルーレルはそつと拳を握りしめる。

アオのその言葉は、アオの父がずっと言い続けてきた言葉だったからだ。

主のその願いを、今度は叶えてやれるだろうか。

一人で孤独に死なせずに、自分も一緒に逝けるだろうか。

主の元へ……今度は自分も。

「でも、目の前で誰かが死んでいくのは、もっと見たくない。もう、僕はあの頃の戦えない子供じゃないんだから」

目の前で、母が死んだ。

姉が死んだ。

そして、父も…。

「ブルーレルと一緒に…僕も戦う」

アオの決意は、きつとこの中の誰よりも、強く儚い決意だった。

『お前は、いつも俺の欲しい言葉をくれるんだ』

第二曲 戦乱を誘う神子「下」

トレリアは一人、悲しそうに俯いていた。

「人々は、なぜ誤った歴史を伝えてきたのです？ 私にはそれが理解できませんわ」

『先人は誤った歴史を伝えたわけじゃえ。あえて正しい歴史を伝えなかった。それを勝手に解釈した奴等のせいで、今歴史はこんなにも現実とかけ離れちゃってる』

ブルーレルは機嫌悪そうに言う。

『それについては、私わたくしがご説明いたしましょう』

カリヨがトレリアの前にずっと歩み出て、微笑んだ。

アルティアが存在するずっとずっと昔から、カリヨたち、核珠は存在した。

それを発見したのが、八人の兄弟だった。

その兄弟は当時一番栄えていた大国の皇子・皇女であった。

国のために見つけた核珠の力を使い、国に未曾有の繁栄を齎した。

よって、国民は彼等兄弟を、宝玉の神子と謡った。

だが、神子にも、寿命が訪れる。

八人の神子が死したと同時に、核珠は八方へと飛び散った。

『それから、私たちはあらゆる主を持ち、沢山の主の願いをかなえた』

何千人もの主を持ち、何千という願いを叶えてきた核珠。

『そして私たちはアルティアと呼ばれる人物を中心に使える、四組の姉妹たちの手に渡った』

その姉妹たちは皆がみなアルティアを師としてでなく、一人の男として愛していた。

そしてついには核珠の力を使い、前面戦争へと発端してしまった。

『彼女達は、同じ願いを持ちながらも、争うことでしかアルティアへの想いを現すことが出来なくなってしまった』

「それが、なぜ歴史を伝えない事につながりましたの？」

『お前は、今まで国を守ってきたくれた信頼を寄せる者達が私情バリバリで起こした、戦争という国民への裏切りを伝えられるのか？』

ブルーレルの言葉は真っ直ぐにトレリアの心に突き刺さっていた。例えば自分が現在の父の立場だったとして、国を守り続けてくれた信頼する者たちに裏切られて、自分はそれを国民に発表して彼等を斬ることが出来るだろうか。

出来ることなら、そんなコトはしたくない。

でも…もし、そうせざる負えない事態が起こったら…自分は、彼等を庇ってしまうかもしれない。

何千という国民を裏切っても。

『それから、神子たちの争いは続いた。大地を腐らせるほどに。だから俺たちは、それを止めたい。そのために、今ココに来たんだ』

アオも、ブルーレルも、シャオも、カリヨも皆の視線がトレリアに集まる。

「…お願いが、あります」

トレリアは今にも泣き出しそうに拳を握りしめた。

「この国を、無意味な戦乱の犠牲の地には、もうしたくありません」
もう大切な者を失うのは沢山だった。

シャオと出会ったあの村には、トレリアの本当家族が、住んでいた。弟が生まれてすぐに、家族から引き離されて、王女として振舞ってきた。

トレリアは、本当の王女ではなかった。

「弟が、いたんです…シャオのいた、あの村に……もう、弟のような犠牲者は出したくありません」

シャオは今にも泣き出してしまふそうなトレリアの手を握った。

「大丈夫。私は、戦うために生まれたけど、戦うことは、守ることだから。だれも、殺させはしない」

シャオの顔から表情が消えたことに気付いたのは、カリヨ一人だった。

『ではまず、グランディエに会いに行かれるのはどうでしょう』

カリヨはその場の雰囲気を変えるように話題を変えた。
その意図に気付くことなく、シャオは呟く。

「グランディエということは、ファティマのところね。賛成だわ」

シャオの表情が戻った事に、カリヨは微かに安堵した。
そして四人は、トレリアー人を残し、部屋を後にした。

残されたトレリアは微かに口元に笑みを浮かべて、紅い指輪を手に嵌めた。

「アルディオ…ゲームの始まりよ」

第三曲 暁降ちの密会「上」

雲に隠れた月が、姿をみせる。

微かに薄明かりに包まれた空に、月はその姿を薄めつつある。

『夜が明ける』

金髪の青年が立ち上がった。

「アルディオ…皆を、あつめる？」

黒いマントに身を包んだ小さな少女が恐る恐る尋ねる。

『…僕が恐いかい。小さなご主人様？』

少女が慌てたように顔をあげた。するとかぶっていたマントのフードがさらりと落ち、その明るい色の髪が露わになった。

「そ、そんなコトは…」

悲しそうに俯く少女にアルディオはゆっくりと手を伸ばす。そしてフードを優しく元に戻す。

『…君の言うとおりだね。みんなを集めてくれる？君なら出来るよね。君ら地の神子は、僕ら核珠の力をかりなくても、特殊能力を持っているんだから』

「わ、わかった」

そういうと、少女は部屋の南にある大きな窓を開けた。

「風よ、我言の葉を同じ定めものの元へ。空の王城で暁降ちの密会を」

風が何かに答えたようにサワサワと蠢く。暫く騒いでいた風は、ふと静かになった。

暫くアルディオと少女は二人で沈黙の中にいた。

『久しぶりの密会だね。アルディオ。それから…地の姫君』

『速かったな、サラリエル。さすが大地の核珠』

アルディオが関心して言うと言とサラリエルは苦笑した。

『風の珠核である貴方には負けるよ』

アルディオは微かに笑った後、苦々しそうに呟いた。

『だが、風と火は天の方が速度も能力も上さ。大地と水が天より勝っている代わりにな…』

「二人とも、そのぐらいにしないか。我が妹が泣きそうだ」

口を挟んだのは、サラリエルの主であるランだった。

ランは少女の実の兄だった。

二人は双子だが、二卵性なため、言われなければ誰も、そうとは気付かない。

『すまない、地の姫君…我らは姫の計らいで、こうして姿を眩まし

ていられる』

サラリエルは膝を突き、少女の手をとった。

そう言つて、四人は開け放たれた窓に視線を向けた。

「みんな、遅い……ね。アルディオ……」

第三曲 暁降ちの密会「上」(後書き)

第三曲「下」は少し離れて掲載します。

第四曲 名を呼ぶ「上」(前書き)

少し過去に遡ります。

第四曲 名を呼ぶ「上」

村のいたるところから上がる火の手。
巻き起こる悲鳴。

シャオは沢山の血涸きに曝された。

『選ばれし白銀の戦士よ、我が声に応え』

脳裏に響いた高く澄んだ声は、ゆっくりとシャオに呼びかける。

『我が声を聞け、天の神子よ』

『焔の恩恵を受けし、天の神子よ。我が名を呼べ』

その声がだんだん近づいて、シャオは自らの定めを、まるでそうではなくてはならないモノのように、受け止めていた。
そして、シャオは知っていた。

彼女の名前を——。

「――カリヨ」

その時、村を襲っていた炎が、シャオを包んで、その手には勾朱の剣が握られていた。

『シャオ…大丈夫ですか？』

カリヨはシャオにしか聴こえない声で語りかける。
心配そうな表情をしている。

「何のこと？」

シャオはまるでなんでもない事のように言う。

そんなシャオの周りには、焼け焦げた家や、親しかった者たちの死体がごろごろと転がっていた。

真つ赤な剣を握りしめるその小さな手が震えているコトを、カリヨはよく知っていた。

『強がらなくてもいいのですよ。辛いときは、辛いといえば…よいのですよ』

「辛いといつても、村の人達が戻る事はないのに？…それに、私の手は、もう汚れてしまったわ。後戻りなんて出来ないの。大丈夫よ、私は戦う為に生まれてきたんだから」

シャオの悲しそうな背を見つめて、カリヨは微かに俯いた。

『シャオ…私の、本当の名前は…カリヨキジンというのですよ。我ら核珠以外、他の誰もが知らない、真誠の名……はっ』

カリヨはそういつと剣と共に、スツと姿を消した。

「こちらですっ…生き残りの方がいらっしやいましたわ!」

翡翠の髪をした、自分より少し小さい少女だった。

少女は血に汚れたシャオを真っ白な毛布で来るんで、連れ帰った。

そこが、あの王城だったのだ。

沢山の血で汚れた手をとって、微笑んでくれた、初めての人だった。

(…オ…シャ…オ…シャオ!)

誰かに呼ばれて、ふとシャオは目を開いた。

「大丈夫? うなされていたみたいだけど…」

アオが心配そうにシャオの顔をのぞき込んでいた。

その黒い瞳に見つめられて、この少年が自分の手が汚れているコトを知ったら、拒絶するだろうか。

沢山の命を奪った、この私の手を――。

第四曲 名を呼ぶ「下」(前書き)

前回に引き続き、過去の物語です。

第四曲 名を呼ぶ「下」

トレリアの城を出てから三日ほどたった。

アオとシャオはブルーレルとカリヨが親しいからか歴代の神子たち同様、すぐに打ち解けた。

『ブルーレル…』

カリヨが、ブルーレルにしか聴こえない『声』で話しかけてきた。

『なんだ？』

『お父様の事、真実を教えなかったの？』

カリヨは悲しそうに顔をゆがめて問う。

ブルーレルは何も言わずに、少し前を歩く、アオとシャオの背を見つめた。

カリヨも、もうそれ以上何も言わずに、シャオの持つ剣に戻ったのかふと姿を消した。

ブルーレルは遠い昔、まだアオが生まれたばかりの赤子だった頃の事を思い返した。

『…真実か。いつかお前にも言わなきゃならないな…俺も他の核珠同様、世襲制なんかじゃないてことを…』

『選ばれし漆黒の戦士よ、我が声に応え』

誰かに呼ばれたような気がして、ミドリはふと立ち止まった。
生まれたばかりの長男をその腕に抱き、空を見上げる。

だが、空もあたり一面に生い茂る木々も、いつもと変わりなくそこにあるだけだ。

ミドリは再び足を進める。

『我が声を聞け、天の神子よ』

またさつきと同じ、子供の声――。

「誰だ？」

ミドリは訝しげにもう一度辺りを見渡す。

確かに聴こえたその『声』は、まだ幼い子供のようにも聴こえた。

『風の恩恵を受けし、天の神子よ。今、その珠を受け取らん』

物凄い風が吹いて、ミドリとその家族を包んでいく。

「きゃああ！！アナタ！！アオ！！」

ミドリは風が吹きすさぶ中、必死に妻とその傍らで脅えたようにこわばった娘に手を伸ばす。

「アスカ！マシロ！」

「パパ！」

差し出した手が触れようとしたとき、ミドリはふと、身体が浮いたような感覚を覚えた。そして気が付くと、そこは何もない空間だった。

妻も娘の姿もない。

そこに存在するのは、自分と抱きしめた長男だけ。

『やっと、声に気付いたか。天の神子の血縁者さんよ』

さつきまで何もない闇だったそこに、小さな容貌をした少年がたっていた。

その少年を包む衣は、とても不思議なモノだった。まるでどこかの民族衣装のようにもとれるその衣。シヨールのような半透明の布が風もないのにふわふわと揺れる。

「誰だ!？」

ミドリは我が子を守ろうと必死にその小さな身体を抱きしめる。

『安心しな！なにも取って食おうってんじゃねえよ。俺の小さな主に会いに來ただけだ。主の命を守るために』

少年は押さない容貌とは裏腹な存在感でそこに座した。

『俺はブルーレルってんだ』

「ブルー…レル…」

ミドリはなぜかその名を聞いたとたん、言いようのない安心感に包まれた。

この少年は、我が子を守ってくれる、と。何の確証もないのにだ。だが、ある言葉にひっかかりを覚えた。

「……主？」

『俺は、核珠って呼ばれる存在なんだ。で、その核珠ってのは、ものすごい力を持ってんだよ。それを制御する人間が必要になる…それが……』

そう言つてブルーレルは手をあげ、ミドリの方を指で指し示す。

「オレか？」

『いや、その子供だ。だが、まだ幼すぎる。それで、お前に白羽の矢が立った。この子供が奴らに見つかからないように、主のフリをしてほしい。…まあ、それには代償がついちまうんだけど……』

ブルーレルの言葉を遮つて、ミドリは言葉をつむぐ。

生まれたばかりの我が子を辛い目にあわせたくはなかった。

その少年の『主』と言う存在。

それはきつと、なによりも重く、大きなものである事を、ミドリはなぜか知っていた。

でもどうして自分ではいけなかったのか。

何故この子でなければならぬのか、はつきりとした事が知りたかった。

『奴が、目覚めたんだ…その目覚めと同時に、その子供が生まれちゃった』

”奴”という言葉に多少のひっかかりを覚えながらも、ミドリはあ

えてその話題には触れなかった。

「代償というのは？」

『無理矢理に主を変えるんだ。俺ら核珠の力は主でなきゃ耐えられない。でも、今のアオじゃダメなんだ。奴らに見つかれば、すぐにも殺される。それを回避させたいんだ』

それは――。

それでは――。

「つまりは、オレが引き受けなければ、アオは死ぬというコトか？」

『ああ』

ああ、そうか。お前はそんな定めを負って生まれてしまったのか……。ミドリは、腕の中で眠る我が子の行く末を想い、涙を零した。

「いいだろう。その身代わりとやらを引き受けよう」

妻と幼い子供たちをおいて逝く事に覚悟を決めて。

自分という存在が消える事に覚悟を決めて。

最後の望みを口にする。

「その代わり、頼みがある。オレはきつとこれから起きる戦乱で前線に行かなければなくなる。その間、家族の無事を知っていたい」

『わかった。俺が、お前に家族の様子を届けてやるよ』

——アオ。俺はお前に嘘をついてる。
お前の父は、病で死んだんじゃない。

オレの主を守る為に、オレに——殺されたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3128b/>

青い空に両手を広げて

2010年10月15日21時00分発行